

修学旅行のバスを降りると、そこには、歴史の息吹を全身で感じられる古の建物と空気があふれていました。世界遺産である法隆寺、金閣寺、仁和寺。建てられた当時の人々はそこに存在しないにもかかわらず、建物自身が威厳のあるたずまいで、当時の栄光や今日までの時の流れを語りかけてくれるように思えました。

日本は、こうした世界遺産を十八件も保有しています。ここ群馬県でもつい昨年「富岡製糸場」が世界遺産として登録されました。さらに、「明治日本の産業革命遺産」として富岡製糸場のように近代の日本の産業発展に貢献した建造物、全部で三十八件をまとめて世界遺産として登録しようという動きを新聞やテレビで知りました。

その中の一つに通称「軍艦島」と呼ばれる「端島」があります。この島は、当時主要エネルギー源であった石炭の採掘が行われていた島です。その端島を含む複数の施設に対し、世界遺産登録の反対を隣国韓国が訴えました。第二次世界大戦中、六万人近い朝鮮人が強制労働を強いられたという事実があるからです。

確かに、韓国の人の立場に立つてみると、そのような悲惨な歴史の残るものを、日本の輝かしい産業の歴史として世界遺産登録されたとしたら、辛い過去を無視されたこと、憤りに耐えないに違いありません。しかし、もしこのまま端島の存在をひっそり人目に触れさせず、そっとしておくならば、そこで起きた強制労働の事実が日本人の意識から薄れ、若者たちには知られぬままになってしまおうのではないのでしょうか。その存在を未来永劫残し、人々に強く意識づけることで、近代産業の発展の陰の大きな過ち、悲惨な事実に対する反省を継承していくことになるのではないのでしょうか。

私は、テニス部に所属していました。一年生の時は、郡内の学校の一年生の中では向かうところ敵なしでした。ですが、二年生になると周囲に並ばれるようになり、どうしても勝てない強敵も現れました。何とかなるだろうという余裕も、次第に焦りに変わり、追い詰められていきました。悔しくても解決策が見つからないそんなときのことです。両親に、いつも大会の時に撮影してくれていたビデオ

映像を見るように薦められました。正直自分の負けている試合は、情けなくて映像から目を背けたくなります。しかし、つらくても必死で映像の中の自分を目で追いました。そして、自分のプレーの一つ一つを客観的に振り返り、反省を書いたノートを見返して向き合うことで、徐々に過ちの連鎖から抜け出せたのです。そして夏の総体では、個人戦で優勝することができました。

こうした経験から、人の記憶は、時間の経過によって薄れ、その時の辛さも時間とともに風化して行ってしまうのだと感じます。だからこそ目に見える形で存在を残し、振り返って考えられるようにすることが、重要なのだと思います。

世界遺産として過去の過ちを振り返らせてくれるものが、日本にはすでに存在しています。それは広島島の原爆ドームです。当初は、「痛ましい記憶がよみがえってくる」などの理由から、保存には反対も多かったそうです。しかし、被爆者の方々からの「こんな思いをするのは私たちだけにしてほしい。」という多数の保存願いが後押しし、唯一の被爆国として核兵器の廃絶を訴える世界遺産となりました。今も国内外から百万人を超える人々が訪れ、核兵器の恐ろしさを伝えていきます。

世界遺産登録の理由は一つでなくてはならないという決まりはありません。そこに戦争の惨禍があったなら、それを後世に伝えていく「反省の遺産」として残すこともできるのではないのでしょうか。

現在日本では、憲法第九条の解釈に関する討論が激化しています。戦争放棄を唱え、平和の礎として、第二次世界大戦の敗戦から学んだ考えが形となった、第九条。もしそれが今後改正されたとしたら、日本はどうなっていくのでしょうか。原爆ドームや端島が、そしてその場所で惨劇の被害者となった人々がその身をもつて訴えてきた悲惨な出来事が、再び繰り返されてしまうのでしょうか。私たちは世界の遺産として残されたものたちが語る声に耳を傾け、それらと向き合わなければなりません。

私は将来、教師になりたいと考えています。そして、様々なことを学んだテニスを子どもたちに指導しながら、これから社会の一躍を担う子どもたちを育てる立場として、平和の大切さ、戦争の悲惨さを正しく伝えていきたいです。過去から学ぶ平和な世界をこれからも継承していくために。